氏　　名	原　田　小　夜
学位の種類	修　士（看護学）
学位記番号	修　士　第　１３１　号
学位授与年月日	平成２２年３月２５日
学位論文題目	がん末期患者の在宅ホスピスケアチームにおける介護支援専門員の多職種連携に関する認識

別紙様式３

論　文　内　容　要　旨

※整理番号	131	(ふりがな) 氏　　名	(はらだ　さよ) 原田　小夜
修士論文題目	がん末期患者の在宅ホスピスケアチームにおける介護支援専門員の多職種連携に関する認識		

【研究目的】がん末期患者の在宅ホスピスケアチームにおける介護支援専門員（以下、ケアマネジャー）多職種連携の実態、連携の必要性や困難性に関する認識を明らかにする。

【方法】滋賀県南部地域の居宅介護支援事業所のケアマネジャー151 人を対象に、自記式質問紙調査を実施した。事業所管理者、対象者に文書で依頼し、調査票の返信を持って研究の同意とした。調査期間は 2009 年２～３月。調査内容は、基本属性、在宅ホスピスケア経験、連携必要度、連携困難度、在宅ホスピスケア困難要因、在宅ホスピスケア役割認識である。要因分析には、χ２検定、Mann-whitney 検定、Kruskal-wallis 検定を行った。在宅ホスピスケア困難要因は探索的因子分析を主因子法（Promax 回転）で因子抽出し、下位尺度得点を求めた。下位尺度間の相関は Spearman の順位相関係数を求めた。有意水準は５％。統計解析は SPSS17.0J for Windows を使用した。

【結果】回収数 134，有効回答数 133（有効回答率 99.3%）。平均年齢 46.3 歳、基本職種は、福祉職 45.8%、看護職 34.7%、その他の職種 18.3%であった。がんに関する研修の参加割合は 55%、がん患者ケアに関する自己学習者割合は 45%で、福祉職が看護職より有意に低かった。在宅ホスピスケア経験者は 60.2%、退院時紹介ケースが 65%であった。経験年数３年以上の経験者割合が有意に高かった。医師、看護師以外のコメディカルスタッフとの連携は少なく、看護職以外のケアマネジャーでは、病院主治医、在宅医、病棟看護師との連携割合が看護職に比べ有意に低かった。連携困難度では、病院主治医が最も高く、在宅医、訪問看護、継続看護室の連携困難度は低かった。在宅ホスピスケア困難要因は、第 1 因子「在宅療養移行支援」、第２因子「在宅ホスピスケア継続支援」、第３因子「本人、家族の病院指向」が抽出された。在宅ホスピスケア看取り経験者の第 1 因子、第２因子の下位尺度得点が有意に低く、第２因子と第３因子間の相関があり、役割認識では「入院中から退院に向けて積極的に介入する」が有意に高かった。

【考察】福祉職の他職種連携割合が低いこと、ケアマネジャーは病院主治医との連携における困難感が強いことから、退院時カンファレンスでは、ケアマネジャーと医師、病棟看護師、看護師以外のコメディカルスタッフとの連携を進める必要がある。在宅ホスピスケア困難要因では３因子が抽出され、在宅ホスピス看取り経験が関連していた。従って、在宅ホスピスケア看取り事例の支援プロセスにおけるチームケア、多職種連携を明らかにすることが重要である。また、在宅での看取りを目標とする場合には、ケアマネジャーの入院中からの積極的な介入が必要であると考えられた。ケアマネジャーのがんに関する定期的な系統だった研修会の開催が必要である。

【総括】病院看護職や訪問看護師が積極的にケアマネジャーとの連携を図るための地域ケアシステム構築が重要である。

（備考）１．研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。（1200 字程度）
２．※印の欄には記入しないこと。